

2021年9月5日 礼拝説教要旨

詩編講解説教76「恐るべき方」

詩編76：8～13、マタイ10：26～31

七十人訳聖書では、詩編第76編の表題に「アッシリアに関わる歌」という言葉が入っています。アッシリアという国は紀元前二千年頃まで遡ることができる非常に古い国ですが、古代メソポタミアの時代、バビロニアと並ぶ強国でありました。一時はエジプトまで支配する勢いがありました。当然パレスチナにも勢力を伸ばしイスラエルに攻め入ります。当時、イスラエルは北と南に分裂しておりましたが、北のイスラエルはこのアッシリアによって滅ぼされ、南のユダ王国にもアッシリアは侵攻していきました。一時は属国になりアッシリアに貢物をすることもありました。

この時代、南のユダ王国はヒゼキヤという王の時代ですが、その父親アハズがアッシリアにおもねって、アッシリアの祭儀を導入したのに対し、ヒゼキヤはそれを改革して、正しい礼拝を確立しました。ところが息子の代になって再びアッシリアの祭儀を入れてしまいます。イスラエルはアッシリアによって国家も脅かされますが、同時に信仰的にも翻弄されていました。その中でヒゼキヤは何とか信仰に踏みとどまろうとした王でした。このヒゼキヤの話は、旧約聖書の列王記下18～20章のところ、あるいはイザヤ書36～39章をぜひお読みいただきたいと思います。ここを読みますと、今日の詩編第76編の内容がよく見えてまいります。

少しかいつまんでお話ししますと、アッシリアの王センナケリブは使者ラブ・シャケをヒゼキヤのところに遣わして降伏するよう求めます。使者は神さまを冒瀆して「なぜこんな頼りないものに頼っているのか」と詰め寄ります。それよりもアッシリアの王に仕えよと言うのです。ヒゼキヤは神さまに祈り、そして預言者イザヤにも祈ってほしいと言います。イザヤはヒゼキヤに神さまの言葉を伝えました。「主なる神はこう言われる。あなたは、アッシリアの王の従者たちがわたしを冒瀆する言葉を聞いても、恐れてはならない。見よ、わたしは彼の中に霊を送り、彼がうわさを聞いて自分の地に引き返すようにする。彼はその地で剣にかけられて倒される」(列王記下19：6～7)そしてこの預言通りのことが起こりました。

この話が詩編第76編に反映されています。「勇敢な者も狂気のうちに眠り、戦士も手の力を振るいえなくなる。ヤコブの神よ、あなたが叱咤されると、戦車も馬も深い眠りに陥る」(6～7節)「勇敢な者」「戦士」「戦車」「馬」というのはアッシリアの軍隊を指していますが、それが「眠る」というのです。眠るというのは死ぬということです。その時に何が起こったのかわかりません。でも不思議な力が働いてアッシリア軍は滅ぼされ、王も殺されました。やがてあのもう一つの強国バビロニアによってアッシリアは滅ぼされることとなります。これがこの世の支配者の末路なのです。

どんなに権力を振るっても、どんなに強大な軍事力を持っていたとしても、神さまの御前にはそれは何の力にもならない。神さまこそ本当に恐るべきお方です。信仰者はそのことを知っているはずですが、けれどもしばしば、この信仰が揺らいでしまう。それよりもむしろこの世の支配者、権力、武力を恐れる。そちらの方に力があると思ってしまう。ヒゼキヤの父親も息子も強大な国アッシリアを恐れたのでしょう。それだけ人間は目に見える形で現れる力に弱いのです。

権力になびく。体制側になびく。力が強い、数が多いほど優勢だと考える。そういう民衆の心理というものがあります。かつてわたしたちの国もそういう心理の中で戦争に突入していきました。また先週の首相の退陣劇などもまさにそういう心理の中で起こるべくして起こったことでしょう。支持率が下がる。求心力がなくなる。そうするとこの人では選挙は戦えないと考え、別の人へ乗り換える。誰が総理なら自分の地位が安泰なのか。そういう駆け引きの中で一国のリーダーが決められる。それがこの国の危うさです。

そしてもっと深刻なことは、そういう心理の中で、神さまも乗り換えるのです。こっちの方が威厳がある。力がありそうだ。見た目やこの世の情勢で判断する。主イエスが十字架で死なれたのも、そういう群衆の心理というものが働いています。初め主イエスの教えに喜んで聞いていた群衆は、いつのまにか主イエスを十字架につけると叫ぶ側になっていきました。そうやって見切りをつける。聖書はそういう人間の姿を見つめています。

聖書の信仰において、神さまの力はどういうところに現れたでしょうか。威厳、神々しさでしょうか。武力で制圧する力でしょうか。そうではありません。例えば、それはエジプトで奴隷であったイスラエルを救い出されるという形で現れました。あるいはこの詩編の背景にある強国バビロニアやアッシリアに絶えず翻弄されるイスラエルの弱さの中に現れました。その民を見捨てず、憐れまれ、救い出される場所に現れました。そしてその神さまの力は何よりも真の人となられたイエス・キリストの出来事において現れます。

それが今日の詩編76編にも示されます。「神は裁きを行うために立ち上がり、地の貧しい人をすべて救われる」(10節) 地の貧しい人を救われるために、神さま自ら貧しくなられ、人となりました。そこにわたしたちは神さまの本当の力を見るのです。目に見える威厳とか、神々しさではない。目に見える姿はむしろ貧しく弱い存在です。この世界をお造りになられ、全能の力を持って支配されるお方が、貧しさを纏われ、十字架で死んでくださった。わたしたちはそこに恐れを覚えるのです。

そしてこのキリストに救われた者は、見た目の威厳や神々しさに惹かれるものではありません。力強く、勇ましいところに頼るのでもない。むしろ貧しさや弱さの中に注がれる神さまの恵みを見ることができる。教会も貧しい。いつまでもマイノリティーです。でもそれでいいのです。だからこそわたしたちは貧しさを顧みられる神さまの恵みを知るのです。パウロも「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮される」(Ⅱコリント12:9)と言いました。わたしたちの弱さを顧みられ、自らも弱く貧しくなられたお方をこそ、真の神さまとして恐れ敬う信仰に生きましょう。